

題目：社会的アイデンティティプロセスの日米中比較
～集団サイズの違いがもたらす影響～

氏名：芝木 美保

指導教官：結城 雅樹

本研究の目的は、人々が自分の所属集団に対して持つ社会的アイデンティティや忠誠心の規定因に、文化や集団サイズの違いが影響を与えているかどうかを探ることである。

社会的アイデンティティプロセスの説明に関しては、社会的アイデンティティ理論 (SIT) や自己カテゴリー化理論 (SCT) が中心となってきた。これらによると、人は自分と自分の所属集団を同一視し、その集団を肯定的に評価することによって、自己概念の一部となる社会的アイデンティティを得るといふ。しかし、このプロセスは東アジア人には当てはまらないということを示唆している研究がいくつかある。また、東アジア人は集団内の関係性を重視し集団内文脈に気を配るといふこともわかっている。Yuki & Brewer(1988)は、これらの知見に基づき、人々の集団というものの捉え方には文化差があるとして、異なる自己概念と集団概念の組み合わせによる 2 つのモデルを提案している。社会的アイデンティティを獲得する際に、欧米では SIT や SCT によるプロセスを表した“均質的集団表象と集合的自己”の組み合わせによるモデルが、東アジアでは集団内の対人関係が網の目状に張り巡らされた“ネットワーク的集団表象と関係的自己”の組み合わせによるモデルが働くだろうと考えられている。また集団サイズの影響に関しては、サイズの大きい集団では集団内の構造が把握しにくいいため“均質的集団表象と集合的自己”のモデルが、小さい集団では集団内の構造が把握しやすいため“ネットワーク的集団表象と関係的自己”のモデルが働くと考えられる。

本研究では、日米中の 3 か国で質問紙調査を行いこれらのモデルについて検討した。前者のモデルに関する変数として等質性認知を、後者のモデルに関する変数として相互依存性認知をそれぞれ独立変数として内集団アイデンティティと忠誠心の規定因を分析した結果、全ての国で忠誠心の規定因として等質性認知よりも相互依存性認知が重要であることが示され、東アジアのみではなく欧米においてもネットワーク的な集団表象が重要となっていることがわかった。また集団サイズに関しては、相互依存性が特にサイズの小さな集団における社会的アイデンティティや忠誠心の規定因として重要であることが示され、予測が支持された。しかし等質性については予測と反対の結果が示された。

以上より、文化差による影響はあまり見られなかったが、集団サイズの違いが社会的アイデンティティや忠誠心の規定因に影響を与えている可能性が示唆された。